

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

IDCJ事務職員として勤務して

一般財団法人国際開発センター (IDCJ) では、2011年度より学部生の新卒採用を開始しました。この採用枠では3年間の期限付きで事務職員として働き、援助案件の受託業務に関する事務全般を担当します。3年間の業務完了後に海外の大学院などに進学する際には、IDCJでの勤務評定の結果に基づき、留学費用を一部支援する仕組みを用意しています。新卒者が将来、開発コンサルタントになりたいと思っても、そこに至るキャリアパスが確立していない現状に鑑み、IDCJとして、ひとつのキャリアパスを提供したいという思いから、こうした制度を導入しました。

私は大学を卒業後、新たな新卒採用枠の第一期生としてIDCJに入職しました。大学時代には開発人類学を専攻し、途上国への関心が高まりました。また英国の大学への交換留学を機に、ナイジェリアやコロンビア、欧米諸国、アジア諸国など世界中から集まった友人達と出会い、毎晩のように経済格差や領土問題など様々な国際問題について寮で語り合ったことで、国際協力分野で働きたい、という気持ちを強く持つようになりました。まずは実務経験を積んだ上で、大学院で実りのある勉強をしたいと考え、IDCJに入職しました。

新社会人として入職したIDCJでは、毎日が学びの連続です。現在私は、援助案件のプロポーザル作成支援、受注決定後のクライアントとの契約交渉、契約締結手続きや精算報告書作成などの仕事を主に担当しています。受託案件の開始から終了まで関わることで、どの案件も時間や予算など様々な制約のある中、最大限の成果を生み出すために関係者が力を合わせていることを実感します。また書類作成においては、句読点や一文字の違いが手続きを止めてしまうこともあるため、細心の注意を払う必要があることを実感しています。

さらに相手国の人々を直接知ることも、仕事の意義を考える上で役立っています。例えば、当センターが実施している「アンコールの森」再生支援プロジェクトでは、現地NGOのJST（アンコール遺跡の保存と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構）と共に、カンボジア国シュムリアップ周辺での植林活動や環境教育支援を行っています。この案件の現地モニタリングのため、2012年6月にシュムリアップを初めて訪問しました。活動を行っているアンコールクラウ村で青年グループに会い、同世代の彼らの夢を聞いたことで、大変刺激を受けました。

(株) IDCJが受託しているJICA委託「ラオス国JICA-ASEAN連携ラオスパイロットプロジェクト（観光振興コンポーネント）」では、2012年5月に代々木公園で行われた「ラオスフェスティバル」へのラオス国情報文化観光省による出展をサポートしまし

た。2012年はラオス国観光年であったこともあり、会場は大盛況で熱気を帯びていました。2日間カウンターパートと一緒に、チーム一丸となって声を枯らしながらラオス国の観光プロモーションを行い、協同作業の面白さを実感しました。



ラオス・フェスティバルのラオス国情報文化観光省の物販ブースで

IDCJに入職して知ったことは、開発援助の世界には様々なアクターがいる、ということです。学生時代にもっていた開発援助のイメージでは、国・援助機関が中心に関わっていると思っていましたが、実際は政策と現場とをつなげる担い手として、民間セクターの存在も大きく、官・民それぞれが持ち味を活かし、開発援助が実施されているということが分かりました。

今後は、IDCJでの3年間を終えた後に大学院へ進学し、専門性を高めるための勉強をしたいと考えています。相手国の社会・経済を理解できるようになるために必要不可欠な分析方法を学びたいと考え、現在進学に向けての準備を進めている段階です。また大学院を修了した後は、開発援助を軸に、豊かさが行き届かない人々の生活を改善するために働きたいと考えています。開発業界には決まったキャリアパスがないと聞きますが、私はこの3年間のIDCJにおける実務経験を通じて、研さんを積んでいけたらと考えています。（文責：国際開発センター 事務職員 平松 朋子）